

多島海のナビゲーション
—中スラウェシ州バンガイ諸島サマ／バジャウ人漁師の海上移動の事例から—
Navigating in the Archipelagic Seas: A Case Study of the Maritime Mobility of
Same-Bajau Fishermen in the Banggai Islands, Central Sulawesi

中野 真備 (人間文化研究機構・東洋大学拠点)
NAKANO Makibi
(National Institutes for Humanities・Research Center of Toyo University)

本研究は、海上のナビゲーション行為を事例に、現代のサマ／バジャウ人漁師による漁撈における身体性について考察する。かつて「漂海民」とも呼ばれたサマ人は、時代とともに居住空間や漁法、船を変化させ、拡散居住した各地域の海洋環境に適応してきた。このうち中スラウェシ州バンガイ諸島（ペリン島）では、浅海～外洋域へ出漁し手釣り漁や延縄漁などに従事するサマ人漁師が比較的多く、海上・陸地・海中の様々な景観や自然物を読み取って移動するナビゲーション技術が発達している。

海上で働く人々が陸地の景観を利用して自船の位置を特定する方法は、日本では（ヤマ）アテ／ヤマタテとして知られる [Igarashi 1974、卯田 2000]。舗装された道路や魚群探知機を搭載した漁船とは異なり、漁師らは自然環境の事物を読み取らなければ眼前に広がる海に「道」を見出すことはできず、移動も漁撈も安全かつ効率的におこなうことはできない。このような厳しい海洋環境のナビゲーションにおいて、サマ人漁師らが身体を媒介としていかに海上に「道」を見出すか、身体性はどのような意味を持ちうるのか、人類学的視座から分析を試みる。

本発表では、中スラウェシ州バンガイ諸島のサマ人漁師らによる複数の海上ナビゲーションを取り上げ、具体的には 4 つのヤマアテ方法（「一直線法」、「二直線法」、「連続法」、単に一带の景観を視る方法）とスター・ナビゲーション、ナチュラル・ナビゲーションを事例とする。また、1970 年代以降に華人系商人がサマ人漁師にエンジンを貸し付けたことから始まった漁船の動力化は、漁師らの海上ナビゲーションにどのような変化を与えたのかについても検討し、海で生きる現代サマ人の身体性について論じる。

【引用文献】

卯田宗平「琵琶湖における船上からの陸地景観認識に関する研究」『ランドスケープ研究』64(5):751-754. 2000

Igarashi, Tadataka. A Traditional Technique of Fishermen for Locating Fishing Spots: A Case Study in the Tokala Islands. *Journal of Human Ecology*. 3(1):3-28. 1974